

今日はメーデーなのだから

■登場人物

美代子

染子

リリー

川ちゃん

■前座

スタッフA

スタッフB

1

■0

開演時刻の5分前。スタッフAが開演前の挨拶のために舞台前に入る

スタッフA「本日はご来場いただきありがとうございます。開演に先立ちお客様に、いつものお願いがあります。携帯電話、スマートフォンなど音の出る機械は電源をお切りください。音響さん以外のスタッフ、及び出演者もよろしくお願いします。電源をオフにしてください。なお、地震が起きた場合は、スタッフが誘導いたしますので、機材の真下は避けて、客席でお待ちくださいますようお願いいたします。…」

ロビーからスタッフBの「すみません…」と呼びとめる声とともに、入場客に混じって、美代子が入ってきて、客席ではなく舞台へむかう。

スタッフA「(美代子に) もしもし…すみません、客席はあちらです」

美代子「(立ち止まって、Aをじっとみる)」

スタッフA「(美代子が進もうとしていた方向を指さして) 駅ならそちらです」

美代子「(満足そうにうなずいて、自分が思っていたその方向へ、堂々と優雅に歩いていく。舞台奥へ消える)」

スタッフA「(呆然と見送っているが、気を取り直して) まもなく開演いたします。ご利用はいまのうちにお済ませください」

ロビーからスタッフBの「お待ちくださいー!」という声。とともに染子が駆け込んできて、そのまま美代子を追って消える。

スタッフA「…」

2

スタッフA、深々と一礼し、退場。

■開演

MO「森山加代子 パイのパイのパイ」

■プロローグ

明転。携帯電話で話す女。品川染子。五十代。ポロシャツにチノパン。ケアワーカーである。

染子「(電話に)…ですから、…納得いただいてご同意を得て…」自身のご同意志でお戻りいただきたいんですよ、…少し時間ください。…どれくらいって、

わかりませんよ。…大丈夫です、しっかりしてます、足取りも、頭も。…え？
 …だから、それをお願いしているんじゃないですか？リーダーひとりで五十人？　じゃなくて、采配してください、…みんなに割り振って、手分けしてやってもらいましょうよ、リーダーなんだから。だって、そもそも一人で二十人以上担当してることに無理があります、八〇年の人生二十五人分って、二千年ですよ、平成に平安時代…平安じゃない、縄文？、縄文時代をどうこうできるはずが………今日から、れいわ？」

染子「(大きく息を吸って興奮を冷ます)じゃあ、休みでいいです、欠勤で突発で。誰かお休みの人に出勤してもらってください。(ため息をついて切る)」

■ 1

五月晴れの屋下がり。赤羽駅三番ホームのベンチ。

SE 駅のアナウンス(赤羽駅3番ホーム)

3

女(…:)「こ」で「女」と書くか、「老女」と書くか、迷うところである「女(70〜80才)」とある場合と「老女」とある場合で頭に浮かぶ情景がまったくことなってしまうのだ。私だけ？じゃないと思う。「老女」はみすぼらしいか妖しいか、どこか異界の者を想像させる言葉だ。そっだ、「老嬢」はどうだろう、俄然おしゃれな雰囲気になるしかもハイカラだ。まあ、「女」でいいか)が座っている。一泊旅行ぐらいの大きさのバッグと小さなハンドバッグを持っている。ハンドバッグを覗き込んでなにかをさがしている様子。美代子である。

染子が買った物した袋とか持ってやってくる、やはり同じくらい大きさのバッグ(リュックでもいい)を持っている。

染子「(美代子に)何かおさがしですか？」

美代子「う〜ん」

染子「私がみましようか？」

美代子「…」

染子「（一緒にのぞく）かぎですか？」

美代子「うん、そうかも…」

染子「このポケットに入っていますよ（見せて仕舞う）ファスナー閉めておきますね」

美代子「困った」

染子「はい？」

美代子「何を探しているのか、忘れた。やばくない？」

染子「わたしもよくありますよ」

美代子「そお？」

染子「忘れたと気づいたときにゾツとしますね」

美代子「うん、ゾツとした」

染子「そのうち忘れたことも忘れちゃうんじゃないか」

美代子「…」

染子「でもそしたら何もなかったことになるから」

美代子「どうなっちゃうの？」

染子「どうなるんでしょう？」

美代子「私は大丈夫でしょ、忘れたことは憶えているんだから」

染子「大丈夫です。（袋からパンを出して）食べませんか？」

美代子「なに？」

染子「クリームパン。甘いものを食べて、脳みそを元気にしましょう」

美代子「パンか」

染子「エディーズ・ブレッドのクリームパンです、ふんわりやわらかいんです」

美代子「お寿司にしない？」

染子「お昼、食べましたよね」

美代子「あ、試してる。呆けてません。いつお迎えが来ても後悔したくないから、好きな物だけを好きなだけ食べたいのよ、お寿司は別腹」

染子「(クリームパンを仕舞う)じゃあ、どうせならおいしいお寿司を食べましょう。少し我慢してください。空腹は最高の調味料…」

美代子「わかった。じゃあ、お楽しみの前に低血糖で倒れるといけないから、パンちようだい」

染子「(食べやすいように袋の口を開けて渡す)エディーズ・ブレッドのクリームパン。わたしのいちおし」

美代子「わかった、わかった」

5

染子「わたしたち、恋人同士みたいじゃないですか？」

美代子「?! …こいびと、って言った？」

染子「言いました」

美代子「聞き間違えかと思った」

染子「このあいだ、70代の男の人、二人、ここでみかけたんです。このベッチ。一人は静かに座ってるんです、もう一人は歩き回りながら身振り手振りで話してて、話しながらパンを渡したんです、今私がしたみたいに、その時、この二人恋人同士かもしれない、って。直観したんです。同性同士だから愛し合っていないなんてことないじゃないですか。ほら、熱海行きだし」

美代子「クリームパン？」

染子「いえ、ピロシキでした」

美代子「ピロシキ…」

染子「そういう風に思った自分にちょっと感動したんですよ、私、すこし自由になったって」

美代子「ピロキシに？」

染子「ピロキシに」

美代子「ピロキシってそういう暗号かなにか？」

染子「暗号？　そういうことじゃなくて、純粹に感じたんですよ、その仕草に、愛を。しかも熱海」

美代子「ピロキシじゃなくて、ムリークパンでも、ということ？」

染子「ええ、ピロキシじゃなくて、ムリークパンでも」

美代子「川崎さんは独り身だっけ」

染子「はい」

美代子「川崎さん」

染子「美代子さん」

美代子「はい」

染子「川崎じゃないです、私。品川です」

美代子「品川。なにが？」

染子「苗字」

美代子「ああ、苗字が品川。で、名前が川崎ね」

染子「川崎は品川の次です」

美代子「川崎さんは、恋人とかいないの？」

染子「え？　それ、聞きますか？」

美代子「だって、私はだめですよ、私はひとり決まっていますから。そういうのは、ひとりでいいんですから」

染子「わかっています、ご主人でしょ」

美代子「ちがいますよ、主人は死んじゃったもの」

染子「え？」

美代子「ご存じなかったの、平塚さんは知ってたわよ」

染子「平塚さん？」

美代子「川崎さんの上司のほら、ちよっときついものの言い方をされる…」

染子「ああ、戸塚ですね」

美代子「主人はあの世にいるんですけど、ときどき訪ねてくるのね」

染子「ときどき？」

美代子「たまに。それで、わたしの冷蔵庫のプリンを食べるの、だから、平塚さんに主人のプリンを買ってきてくださいって頼んだら、ご主人は死にましたよって、それはわかっているって、だからプリンしか食べないんだって」

染子「戸塚、いえ、平塚は買ってきましたか？」

美代子「買ってきてくれたんだけど、糖のとりすぎはからだによくないからってタニタのプリンなのよ、死んでるのに体に悪いって、おかしくない？からだ、ないわよ」

染子「まあ、糖は脳にも影響あるので、霊にも害があるんじゃないか、と」

美代子「そうなの？ 霊に害があるのは塩だけじゃないんだ」

染子「はい」

美代子「平塚さん、意外にいい人なのね」

染子「まあ、そんなに悪い人じゃないです、まあ、私は苦手ですけど」

美代子「わかるわかる」

染子「わかります？」

美代子「わかりますよ」

染子「やっぱり、美代子さんは人を見る目があるって思っていたんですよ」

美代子「あら、わかる？」

染子「わかります。どんなお仕事されてたんですか？」

美代子「水商売」

染子「人を使ってらした」

美代子「そんなに大ぜいじゃないけど。とつかえひつかえ、出入りは多いわね、中には続く子もいるけど、しっかりした子は独立しちゃう」

染子「たとえば、戸塚は、平塚は続くタイプ？」

美代子「だめ、あの人は接客には向かない」

染子「じゃあ、私はどうでしょう」

美代子「川崎さんは、まだわからないわねえ」

染子「まだって、もういい年ですよ」

美代子「女は50過ぎてから花咲くの」

染子「美代子さんが言うのと、真実の重みがあります」

美代子「だって、ほんとのことだもの」

染子「お寿司、買わせてください」

美代子「折より桶でおねがい」

染子「食べきれませんよ」

美代子「しょうがない、川崎さんも召し上がれ」

染子「それでも残っちゃいます、みなさんと食べますか？」

美代子「（顔が曇る）みなさん？」

染子「あ、いえ…」

美代子「帰らないでしょ」

染子「はい。ごめんなさい、つい…」

美代子「帰らないわよ」

染子「そうです、そうです、ついっつかり、言っちゃって」

美代子「実は、すぐ帰るつもりだから、うっかり、言い間違えた」

染子「ちがいますって」

美代子「フロイトの錯誤行為」

染子「なんですか？ それ」

美代子「人を騙そうとするとボロが出るといいう学説」

染子「へえ」

美代子「どうなの、ほんとのこと、言って」

染子「わたしに、美代子さんは騙せませんよ。見抜かれてるもの」

美代子「そう言って油断させてる」

染子「まさか…」

美代子「ぜったい帰らない。あんな乞食小屋」

染子「小屋ですか…そんなにみすぼらしくはないと思うけど」

美代子「私、騙されたの。だって、あそこは病院じゃないでしょ」

染子「はい、病院じゃないです」

美代子「頭のおかしい人ばかり…でも病院じゃないのね」

染子「病院じゃあないです」

美代子「病院じゃないんだ、やっぱり。」

染子「…」

美代子「病院じゃないならなんなの？」

染子「それは…」

美代子「病院じゃなかったら治せないでしょ」

染子「治せない…はい」

美代子「治せなかったら、治らないじゃない、治らなかったら、出られないじゃない」

染子「あ！」

美代子「治せないくせに、どうのこうの、うるさくて、いったい、どうしたのかしら」

染子「そうですね、ご不自由なところを手助けさせていただいて、自律した生活をご支援する」

美代子「おせわさま」

染子「どういたしまして」

美代子「ありがたいけど」

染子「おそれいます」

美代子「齡をとつたら、古くなって、あっちこちガタがくるわけ、反応が遅くなる、動きが鈍くなる、やることを忘れる、それ、しょうがないじゃない」

染子「誰でも、そうなります」

美代子「でしょう」

染子「…でも危ないですし」

美代子「だから外に出られない？」

染子「安全のために」

美代子「出しちゃいけないって？」

染子「おひとりでは。あぶないので」

美代子「私、聞いてなかった、とじこめられるとはね。どこの姫君じゃ」

染子「…」

美代子「いろいろやらなくちゃいけないのに、困ったわよ、出してくれないんだもん」

染子「…」

美代子「誰だったっけ、最初に入院していた病院を退院しなくちゃいけないから、行く先を探すって言われて。わたし、家に帰るから大丈夫って言ったのに…」

染子「ご親戚だったと思います」

美代子「親戚付き合いなんでないわよ。ま、いいや、出られたから」

染子「美代子さんは、これから、どちらへ？」

美代子「仕事よ」

染子「仕事？」

美代子「仕事よ、だってほら、ねえ、たいへんよ」

染子「そうですね」

美代子「でしょう、だって、あれでしょう」

染子「アレです」

美代子「あなたも？」

染子「ええ。もうそういう時にあれですから」

美代子「え？ それはないわよ」

染子「ですよね〜」

美代子「でしょう。そこはやっぱりねえ」

染子「いやだあ、やっぱり〜？」

美代子「じゃあ、そろそろ…」

染子「ええ、そろそろ…」

美代子「…」

染子「…」

美代子「…きれいな空ね」

染子「…はい」

美代子「いい日だこと、お迎えが来そう」

染子「はい…え？ そんな…」

美代子「今日はメーデーでしょ」

染子「あ、そうです」

美代子「メーデーばんざ〜い」

染子「（声をおとして）ばんざ〜い」

美代子「ん？ 声が小さい」

染子「そ、そんなことないですよ」

美代子「なに？ 私の耳が遠いとでもいうの？」

染子「えっと…人目を憚っているのです」

美代子「いやだ、メーデーなのよ、堂々としなさい」

染子「はい（声は小さいが堂々と）」

美代子「（うたう）きけ、ばんこくの労働者〜はい」

染子「(うたう)きけ、ばんこくのろーどーしゃー」

美代子「とどろきわたるメーデーのくはい」

染子「とどろきわたるメーデーのく」

美代子「示威者に起こる足取りと、はい」

染子「じいしゃにおこるあしどりと」

美代子「未来を告ぐる鬨の声、はい」

染子「未来を告ぐるときのこえ」

美代子「汝の部署を放棄せよ、なんじの価値に目ざむべし、はい」

染子「なんじのぶしよを放棄せよ、なんじのかちにめざむべし」

美代子「全一日の休業は、はい」

染子「全いちにちの休業は」

美代子「社会の虚偽をうつものぞ、はい」

染子「社会の虚偽をうつものぞ」

美代子、聴衆に拳を振り上げアピールする。染子、わりと楽しそうにしている。

美代子「ストライキよ、ストライキしましょう」

染子「ストライキ、ですか」

美代子「われわれは、蜂起して放棄した」

染子「全いちにちの休業は、ひとりでやったら、ただの欠勤です」

美代子「労働者の権利は？」

染子「そんなこと言ったら、病欠にされます、うつ病だねって」

美代子「メーデーの歌をおしえてくれた人。自由と平和を心から信じていた人」

染子「さっき言った、ただ一人の人？」

美代子「どうかしらん」

染子「え？ 違うんですか」

美代子「それはね、あの世に持っていく秘密その1」

染子「その2、もあるんですか？」

美代子「その、500はあるわね。記憶力がいいのも考えものだな」

染子「ぜんぶ持ってっちゃうんですか？」

美代子「しかたないでしょ」

染子「もったいないなあ」

美代子「聞く？」

染子「聞きたい」

美代子「変なの。いつもは、あとで、あとで、って人の話なんか聞く暇ないでしょう」

染子「そうでした。変ですね、ご利用者様のお世話するのが仕事なのに、ろくにお話もしないなんて」

美代子「やっとなんか聞いた？」

染子「やっとなんか聞いた？」

美代子「ヤットコサツと…」

M1「東京節」

「東京名物、満員電車、

何時まで待っても、乗れやしねえ、乗るにや喧嘩腰、命がけ、ヤットコサツと、空いたのがきやがっても、ダメ、ダメ、と手を振って、またまた止めずに行きやがる、ナンダ故障車か、ボロ電車め、ラメチャンタラ ギツチョンチョンで、パイノパイノパイ、パリコと パナナで、フライ フライ フライ

二人、お茶などいただく。

染子「わたし、このホームを通勤に使っていたんです。でね、仕事に行くのに熱海行き？って思っていたんです。じっくりこないって。熱海って非日常なんですよ」

美代子「だって、熱海まで行かないでしょう、途中で降りるでしょ」

染子「そこですよ、降りなかったら熱海へ行っちゃうんです、非日常へ、毎日その危険と隣り合わせ」

美代子「川崎さんは、変なこと言うのね」

染子「わかってるんです、自分が変なのは。気にしないことにしました」

美代子「熱海、行ったことあるわ、会社の旅行で」

染子「慰安旅行」

美代子「慰安旅行、そう、それ。」

染子「お勤めもされてたんですね」

美代子「最初の仕事は事務員だったのね、帳簿つけとか」

染子「へえ。ちよつと待ってくださいね、今、私の頭の中のスクリーンに若い美代子さんが見えてきました。そろばんをはじいて、ペン先をインク瓶に

ひたして、細かい数字を書きこんでいます。すつと背筋を伸ばして、左手をこう添えて、ペン先がインク瓶に触れてカチツと固い音がする…」

美代子「字が下手だって言われて、ペン習字をやったわ」

染子「日ペンの美子ちゃん」

美代子「なあに？」

染子「私が子どもの頃、雑誌の裏表紙に広告が載っていたんです。ペン習字の通信講座です」

美代子「書類は全部手で書いたわねえ」

染子「そんなにむかしじゃないですよ、私だってカーボン紙とか使いました」

美代子「インクのおいが懐かしい」

染子「そろばんの玉をはじく音、はらう音」

美代子「電話をかける、（手振りをつけて）ジーこ、ジーこ…」

染子「取り次ぐときに『お待ちください』と言って、こう受話器をタテに置いて…」

美代子「受話器を置くと、オルゴールが流れる、なんかこんなの（手でかたちづくってみせる）」

染子「ああ、かすかな記憶の片隅にそんな機械がみえてきました、エリーゼのために…」

美代子「（エリーゼのために、の節をくちさむ）たらららららららら…」

染子「なんでエリーゼのために、なんででしょうね」

美代子「（続けている）たらららん、たらららん…」

染子「私、ずうっと、エリーゼが気になって気になって、いまでも、曲を耳にすると、ああ、私はエリーゼのためになにかできたのだろうか、と神妙な気持ちになります」

美代子「ふうん」

染子「エリーゼは不幸な女なんです」

美代子「そんなことない」

染子「え？」

美代子「エリーゼなら、うちのお店にいたわ、真面目な月給取りと結婚して、幸せそうだったわよ」

染子「へえ。よかった。私の中のもやもやがひとつ消えました」

美代子「慰安旅行と言えば余興のかくし芸」

染子「かくし芸…という日本語がおくゆかしい」

美代子「では、川崎さんの『ヤットン節』から、どうぞ！」

染子「(深々と礼をして、くるりと背を向け、豹変。ふり付きでいきいきとうたう)

「お酒呑むな、酒呑むなの、ご意見なれど、ヨイヨイ

酒呑みや、酒呑まずに、居られるものですか、ダガネ

あなたも、酒呑みの身になってみやしやんせ

ちつとやそつとのご意見なんぞで、酒やめられましょか、

トコねえさん、酒もってこい

山からけつころがしたる松の木丸太でも、ヨイヨイ、

世に出りゃ不細工無様なお多福おかめでも、ダガネ

妻と名が付きや、まんざら憎くない、ヨイヨイ

ひとに袖づまひかれりや、ホントに腹が立つ、

トコトンのヤットントン

美代子「トコトンのヤットントン〜 ねえねえ、川崎さん、なんでこんな変なうた知ってるの？」

染子「祖父がうたってました」

美代子「酒持って来いって」

染子「はい」

美代子「酒も煙草もよく子どもが買いに行かされたもんね」

染子「最近はしないですね、親のおつかい」

美代子「だって、酒屋も煙草屋も、ないでしょ」

染子「八百屋も魚屋も荒物屋も乾物屋も駄菓子屋も牛乳屋も本屋も文房具屋も……」

M2「東京節」

「東京はよいとこ、面白や、豆腐、みそ豆、納豆、桶屋、

羅^ら宇^お屋、飴屋に、甘酒屋、七色とんがらし、塩辛屋、

クズーイクズーイ 下駄の齒入れ、あんま、鍋焼、チャンしゅうまい、

唄の読売や、どうじやいな

ラメチャンタラ ギツチョンチョンで、パイノパイノパイ、

パリコと パナナで、フライ フライ フライ

美代子「バーも。パブも。スナックも。キャバレーも。うたごえ酒場も。名曲喫茶も…」

染子「もう絶滅寸前」

美代子「ダガネ」

染子「(ためいき)みんな知らないんです、酒買って来いって威張ってる親父も、スナックで軍歌をうたうおっさんも、吉原の女郎買い…」

美代子「若いから」

染子「若くてまじめで、仕事熱心です。それで勉強をして資格をとります」

美代子「…四角…四面のやぐらの上で…」

染子「(スマホもしくはパンフレットを読み上げる)近年の介護施設では、単に機能的回復や介護予防といったことだけではなく、高齢者に「喜びや生きがい」を与えることが重要視されてきています。「設備」「食事」といったサービスマスよりも、レクリエーションが大きな可能性を秘めた分野である²⁰とは間違いありません。――」

美代子「かくし芸教室か。私も、習い事はいろいろやったわねえ、歌に踊り、手品や占星術…」

染子「…私もそろそろ高齢者に手が届くじゃないですか、「喜びや生きがい」をくれるって言われても、ねえ…」

美代子「…」

染子「…」

美代子「そうだ。慰安旅行、かくし芸の話だったでしょ」

染子「そうそう、そうでした」

美代子「思い出したのよ。ふたりで『金色夜叉』をやったのね、熱海だから」

染子「ふたり？　メーデーの彼？」

美代子「金色夜叉、知ってる？」

染子「♪熱海の海岸散歩する、寛一、お宮の二人連れ」

美代子「わたしが貫一で、彼がお宮」

染子「あ、へえ」

美代子「(貫一で)ああ、宮さんこうして二人が一緒にいるのも今夜ぎりだ。

…… よいか、宮さん、一月の十七日だ。来年の今月今夜になったら、僕の涙で必ず月は曇らして見せるから、月が……月が……月が……曇ったらば、宮さん、寛一は何処かでお前を恨んで、今夜のように泣いてゐるとおもつてくれ」

染子「(宮になって)寛一さん」

美代子「おおうけ。男と女を入れ替えるだけで、こんなに面白いんだって。やってた私たちも大笑い」

染子「異化効果、ブレヒトですね。美代子さん、深いです」

美代子「誉めてる？」

染子「はい」

美代子「考えたのは、あの人。彼は社会人劇団に入って働きながらお芝居をつづけたわね」

染子「美代子さんは、入らなかったんですか？ 劇団」

美代子「以上、秘密その1」

染子「え、それでおわり？」

美代子「おしまい」

染子「へえ」

美代子「そんなものでしょ、恋なんて」

染子「ええ」

美代子「川崎さんは？」

染子「品川です」

美代子「品川？」

染子「はい」

美代子「いやだ、なんで？」

染子「なんでも。品川なんです」

美代子「私は、池袋」

染子「池袋？」

美代子「仕事」

染子「え？」

美代子「そろそろ行くわよ」

染子「あの…」

美代子「うちの店で働かない？」

染子「え？」

美代子「いつまでも休んでられないわよ、まったく」

染子「わたしで勤まりますか？」

美代子「変なこと聞くのね。気が進まない？」

染子「いえ。やりたいけど、なんか、やりたい。うん。できるかな…」

美代子「できるかどうか、なんて、やってみなけりやわからないでしょ」

染子「やります」

美代子「オーケー。では」

染子「はい！」

美代子「…？」

染子「？ 美代子さん？」

美代子「ここ、どこだっけ？」

染子「お店、池袋なんですね」

美代子「（うなづく）」

染子「大丈夫です。行きましょう」

二人、7番線へ向かう。

暗転

■ 2

染子が電話をしている。

23

染子「…辞めます。…転職先ののっぴきならない事情で今日から辞めます。…今日から辞めますって、変ですね。（笑う）…昨日で辞めます、か。…ええ、ええ、うちで働かないかって。え、誰に？って、美代子さんですよ。あ、だから、美代子さんも今日でそこは辞めます。…。辞めるは変？ですか、じやあ、退院、そう退院するんです。もう、治ったんです。…。ばかなこと？ どうして。本人が仕事に戻ると云ってるんです。私に働かないかって。…。おかしくないですよ、ちゃんと私、品川を、まあ、川崎っていつていますけど、…なんでもありません。あと、よろしくおねがいます。……………（しばらく向こうの話をきいていたが、明るく）じやあ、クビでいいです」

染子、電話を終えて、美代子に…いない！ 慌てて美代子の姿を追う（ハケ）

舞台の奥にリリー。手にマイク。実は、「こ」は美代子さんのお店。

リリー「こんばんは、みなさま、こんばんは。いちど歌ってみたかった憧れの曲を歌ってみたいと思います。石原裕次郎は永遠のヒーローです。お聞きください。『泣かせるぜ』…<https://youtu.be/C8uJ2Er0IU>

M3『泣かせるぜ』（カラオケ）

リリーがM3『泣かせるぜ』をきもちよく、うたう。

唄い終わって、深々と頭を下げる。と川ちゃんが拍手をしながら入ってくる。

リリー「どうもありがとうございます。男か女かわかんなくなってきました…」

24

川ちゃん「リリー、最高！ 泣かせる」

リリー「どうも（まいど、とか、ひとこと挨拶）」

川ちゃん「（胡瓜とか茄子とかを出して）おねがいしてもいい？」

リリー「セロリもいけるよ」

川ちゃん「セロリは苦手」

リリー「喜ぶ人いるって」

川ちゃん「自分がキレイなものは出さないことにしてるもん」

リリー「うちは、田舎だったから、糠漬けの胡瓜出して水で洗って、まるのまんまかじっておやつにしてたなあ」

川ちゃん「ワタシはね、マダムの（糠漬け）食べて、初めておいしいって。それからは毎日」

リリー「糠分けてもらって、自分のところで漬ければいいのに」

川ちゃん「そんなことしたら、味が変わっちゃう」

リリー「まあね」

川ちゃん「それに、ぬかみそのニオイは苦手」

リリー「ドロンパか（注・ドロンパというのは、オバQにでてくるアメリカおばけ。オバQは、…わかるよね）」

リリー、ドレスのうでをまくり、胡瓜とか茄子とかを持ってキッチンへ。（シモソデ中にキッチンがある）

川ちゃん、足元などを気にしている（猫をさがしてる）

25

川ちゃん「ねえ、餌やった？」

リリー「（奥から声だけ）エサというと、マダムがご機嫌を損（そこ）ねますことよ」

川ちゃん「おつけもの、ぬか床かき混ぜる手が変わると味も変わるんだって。

…人に頼んでおいてこんなこと言うのもなんなんだけど」

リリー「（出てきて）ちょっと、外みてきて。」

川ちゃん「いないの？」

リリー「（うなづく）」

二人、外へ

懐中電灯をもった川ちゃんが、うろちよろ。

川ちゃん「ルオー、ルオー……」

染子がきよるきよるしながら、やってくる

染子「(川ちゃんに)すみません、つかぬ事を伺いますが、この辺にお住まいですか？」

川ちゃん「はい」

染子「このへんで、シャルトリューという種類の猫を飼っている人、ご存じないですか？」

川ちゃん「あなたは？」

染子「私は、そのシャルトリューという珍しい種類の猫を……」

川ちゃん「猫をどうしたんです？」

染子「いえ、猫じゃなくて、猫の飼い主を私が知っているんですが」

川ちゃん「ちよっと、待って。さっきあなた、このへんで、シャルトリューという種類の猫を飼っている人、ご存じないですか？　って言っていましたよ」

染子「はい、このへんで、シャルトリューという種類の猫を飼っている人、ご存じないですか？　ってききました」

川ちゃん「それ、あなたですね」

染子「え？」

川ちゃん「シャルトリューという種類の猫を飼っている人、ご存じなのは、あなたですよ」

染子「あ、ほんとだ。いえ、そんなはずは…」

川ちゃん「まあ、私も知っていますよ」

染子「いぢわるですか」

川ちゃん「私はシャルトリューという猫を飼っている人を知っている人を知っているのです」

染子「それは、私のことですか？ 知っているといわれるほど知り合えたとも思えません」

川ちゃん「…（シャルトリューと言う猫を知っている人を知っている人を知っている…人を…とぼそぼそ言いながら指を折って数えたりしている）」

川ちゃん、指を折って数えたり、首を傾げたりしながら、奥へ消える。

27

川ちゃん、リリーを連れて戻ってくる

川ちゃん「（染子に）シャルトリューと言う猫を飼っている人を知っている人です」

染子「あ」

川ちゃん「ちよつと警戒したんですよ。悪い奴らは、お年寄りまで食い物にしますからね」

染子「おっしゃるとおりです。嫌な世の中ですねえ」

リリー「*（関西弁に変換）ほんとに。暮らしにくくなりました。人間はギスギスするし、景気は悪いし、おかげで商売あがったりです」

染子「商売？」

リリー「*うちは、水商売やけど、どこもかしこもあかんやろ」

染子「お店やってらっしゃるんですか？」

リリー「*そう。その猫のいるお店のお隣さん。（川ちゃんを示して）こちらが反対側のお隣さん」

川ちゃん「（会釈）」

染子「やっぱり」

リリー「*やっぱり、何？」

染子「いえ、美代子さんが言ってたとおりの方だなって」

リリー「*どう言っていたかは聞かないことにする」

染子「そうですね」

リリー「*そうか…」

染子「あの…」

リリー「…口は悪いけど、…けど…（※関西弁で）いい人だったのに、早すぎるよ」

川ちゃん「（リリーをみる、同感なのである）」

染子「え？」

リリー「（※関西弁、以降の台詞も）ちょっとごめんなさい…（と言って両手で顔を覆い泣く）」

川ちゃん「（同じく）」

染子「（みているうちにもらい泣きする）」

リリー「*ルオーは私がちゃんと面倒見るから…、安心して…（ハツとなつて）あ！ルオー！」

川ちゃん「ルオー」

染子「ルオー？」

川ちゃん「シャルトリュー種の猫の名前」

染子「あ、ルオーというんですね」

リリー「(川ちゃんに)ルオー、いた？」

川ちゃん「(首を横に振る)」

リリー「*今までこんなことなかったんだけど」

川ちゃん「どこいっちゃたんだろ」

染子「そのルオーなら」

リリー「*知ってるの？」

染子「ええ、今、美代子さんと一緒にいます」

リリー「え？ え！ じゃあ…。ルオーも…(また、両手で顔をおおい、しやがみこむ)」

29

川ちゃん「(おなじく)」

染子「あの…」

リリー「…」

川ちゃん「…」

染子「美代子さん、お店の場所が分からなくなってしまっ…。そしたら猫が」

リリー「(顔を上げる)」

染子「迎えにきてくれたんですね、ルオー」

リリー「え、じゃあ」

染子「おふたりともご健在です、ピンピンしてます」

リリー「いやだあ、わたしったら、はやとちり…」

染子「美代子さんが、おっちょこちよいだけど、愛らしい人だって」

リリー「(染子に) わたしのこと?」

染子「はい」

リリー「おっと。ただの関西のおばちゃんや。リリー、といいます」

染子「品川染子です、美代子さんはわたしのことを川崎さんって呼んでます」

川ちゃん「え?」

染子「はい?」

川ちゃん「いえ」

リリー「(笑う) *あの人昔から人の名前を覚えてないんですよ。だから、勝手に名前つけちゃうの、そうそう、リリーもね、あの人がつけたんだって。で、お店の名前も「ゆうじろう」から「とらさん」に変えたの。スナックとらさん。なんでやねん」

染子「スナックとらさんのママのリリーさん」

リリー「よろしくね」

染子「昔から、なんですネ」

リリー「昔から決まりきったことがキライって言って。(川ちゃんに同意を求めて) ねえ、カワちゃん」

染子「カワちゃん?」

川ちゃん「カワちゃんこと川崎です」

染子「川崎さん?」

川ちゃん「本名」

染子「じゃあ、下の名前は? 横浜さん!」

川ちゃん「？」

リリー「？」

染子「私、美代子さんのお店で働くことにしたんです」

リリー「いやあ、ますます、よろしくね」

川ちゃん「よろしくね」

ルオーが出てきて、三人の足元をゆっくりと通り過ぎていく。(のを三人が目で見追う、視線、舞台奥へ)

染子、リリー、川ちゃん「ルオー！」

舞台奥に、仕事着(ドレス)に着替えた美代子が現れる。

リリー、川ちゃん「マダム！」

染子「美代子さん」

美代子「(女2に) マダム」

女2「マダム…」

リリー「おかえりなさい」

川ちゃん「(感極まって声が出ない)」

美代子「ただいま！」

■FIN

M4 フラワーカンパニーズ「東京タワー」

「…年は取るぜ

よ」れてくぜ

いつか死ぬぜ

神様はいないぜ